

之間敷哉、右等之趣、得と勘辨仕可申上旨、御書取を以被仰渡、勘辨仕候處、市中女醫師之儀、中條流を申立ニ致し候上は、都而出産之手當、經水不順之療治向は、持前ニ候處、近來血道之療治致し候ものは無數、墮胎之儀を重モニ引受、妊身のもの共を、猥に逗留爲致、療治代飯料等、日數凡七日見積ニ而、金壹兩貳分位より、頼人之身元ニ寄候而ハ、手重ニ申成、過分之金高を申受候類も有之哉ニ御座候、尤難産等之節は、兒を殺、母を助ケ候業は、元來産科之預り候醫術ニ可有御座、右女醫師ニ限リ候生産ニも無之候間、市中女醫師總而御禁止被仰出候共、難産之手當等ニ差支は有御座間敷併墮胎之儀ニ不拘、血道之醫師正く致し候分は、不苦儀と奉存候、且又生質不慎之もの共、向後之覺悟も無之、及密會候は、人情之難止儀ニ付、墮胎之産業取潰し候、迎男女轉び合之根を斷テ候迄ニは行届申間敷哉ニ候得共、何れニも仁術を表ニ致し、内實殘忍之所業ニ付、墮胎之儀をば、嚴敷御禁止可相成筋と奉存候、百姓共、大勢子供有之候得ば、出生之子を産所ニ而、直ニ殺候國柄も有之、以來右體之儀無之様明和度御觸之趣も有之、墮胎義も、右同様、不仁之至、以後急度相止、若相背候ものは、吟味仕候見込を以、別紙之通り市中江申渡候様可仕哉ニ奉存候、依之御書取返上、此段奉伺候、以上、

七月

遠山左衛門尉

鳥居甲斐守

○按ズルニ、墮胎ノ事ハ、禮式部誕生祝下篇ニモアリ、參看スベシ、

〔漫遊雜記上〕大原村一婦、戴薪過洛下、顔色忽若有所苦者、俄坐道側、自舉一子、手親洗拭、入其傍家乞冷水一盞、喫之而去、行路觀者託異傳語、可見勞動形軀者無難産也、

〔春雨樓叢書二十三〕産婦

小琉球の島の邊は、婦人皆産すれば、其産屋の邊りにて、一七日が間、晝夜火を燒ことなり、家富る